ガーデニングサポーター養成講座

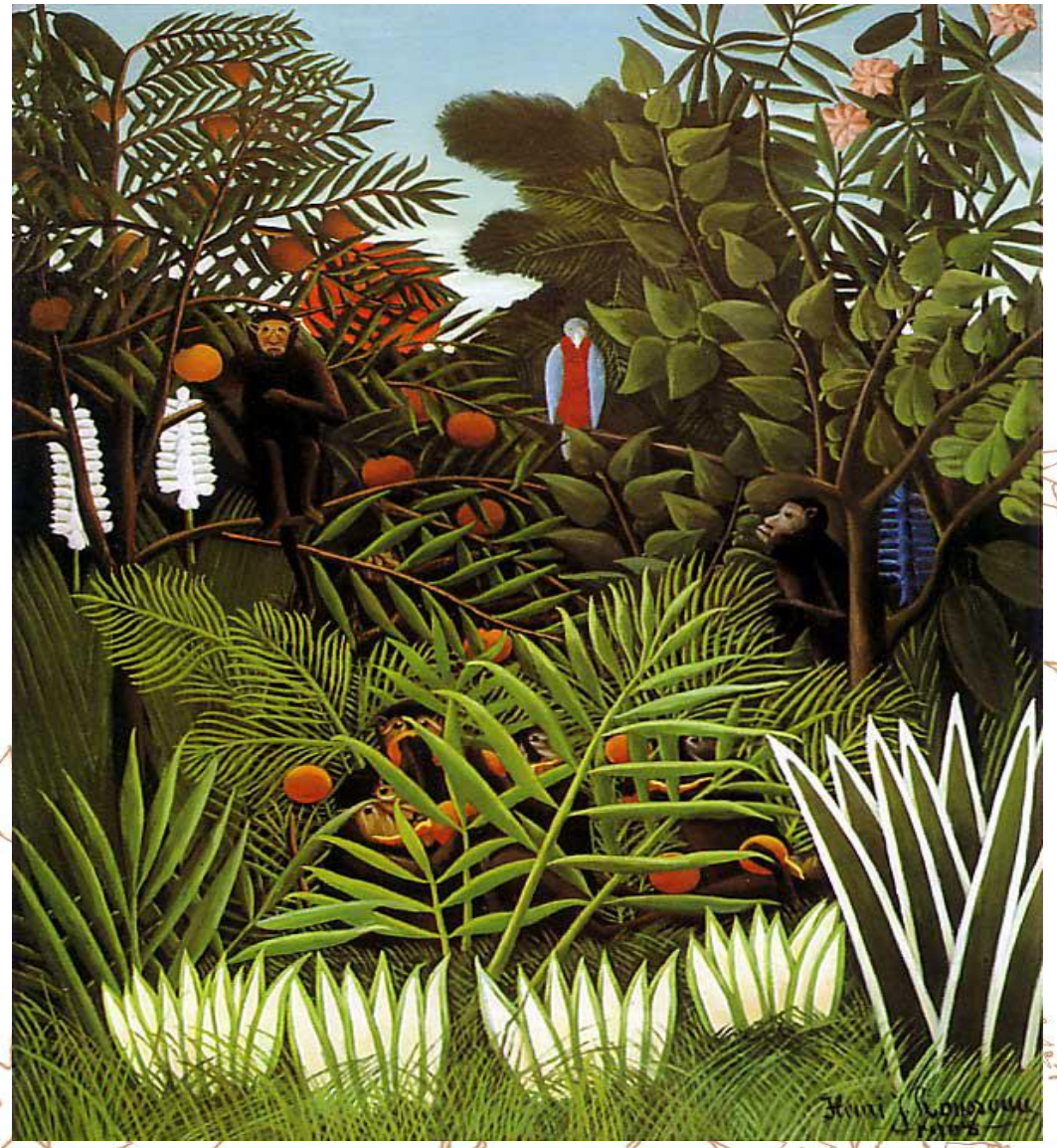
ベランダガーデニング入門　7月
観葉植物・多肉植物

観葉植物・多肉植物

- 観葉植物・多肉植物とは
- 寒さに強い観葉植物
- 観葉植物の選び方
- 育て方について
- 繁殖について
- スパティフィラム
- サンセベリア
- ピレア
- 多肉植物
- サボテン

観葉植物・多肉植物とは

観葉植物・多肉植物とも熱帯・亜熱帯の原産地が尊ばれるという特徴があります。ヤツデや万年青なども葉の美しさを愛でるのですが、温帯性植物は何故か仲間には入れてもらえません。特段はっきりしたきまりは無いのですが、この絵のような熱帯の夢を掻き立てる植物が、昔西欧でもてはやされたなごりではないのかと思います。
我が国で一般化したのは戦後のことで、西洋へのあこがれが投影されている様です。
多肉植物についてもおよそ同様ですが、特殊な環境に生育する場合が多く、一概に説明することは困難です。



寒さに強い観葉植物

銀座通りの植栽で地植えされたコルジリネです。
都市部では、ヒートアイランドといって、気温がその周辺の郊外部に比べて高温を示す現象が起きる場合があり、東京の中心部では、顕著に見られます。
昔は、このような観葉植物は冬に枯れてしまったのですが、多少なりと寒さに強い種類のものは、地植え越冬も可能です。鉢栽培と異なるところは、根が冷やされないため有利なことと、冬場に雨が降って湿気による根腐れの危険があることです。
昔は銀座といえば柳でした。柳は湿気に強く、昔は水路に囲まれた銀座には最適の街路樹だったのです。

観葉植物の選び方

これも銀座通りですが、真ん中の多肉植物はセダムのようです。別な用土で鉢植えに植わっています。風通しを考えたのかもしれません。
奥にインドゴムの木とフェニックスが地植えしてあります。どちらも熱帯植物で、以前は温室内で管理するものでした。それぞれ同種では、最も耐寒性の強いものが選ばれています。
観葉植物・多肉植物は、生育速度が極度に違います。手に入れる前に十分に調べて下さい。

育て方について

観葉植物と多肉植物は、種類によって大きく生育環境が異なり、一概には言えません。上手く育てている方に聞いて参考にするのが一番よいです。

水やりと肥料についても同じです。熱帯であっても、低地か高地か、降雨量の多寡などにより全く違った育て方が必要となります。
植木鉢で育てる場合は、用土と鉢の材質が重要です。プラスチック製や陶器製の釉薬の掛かった化粧鉢と素焼き鉢と比べると潅水量が大幅に異なります。水はけのよい用土で素焼き鉢を使用すると日に幾度も水をやらなければなりませんが、生育は可能です。逆にプラスチック製の鉢で水はけの悪い用土を使用した場合は、根腐れの原因となることが多く育てるのに苦労します。
一般に観葉植物はアルカリ性の土壌を好む場合が多いのですが、パイナップルのように酸性を好むものもあり、注意が必要です。

繁殖について

観葉植物は、一般に株分け、挿し木などで簡単に増やせる場合が多いです。特に梅雨時から初夏にかけては、成功する場合が多いのですが、大抵は生育期が秋までですから、早めに始めないと十分に根付かないうちに冬になり失敗する場合があります。
植物総てに言えるのですが、枯れたと思ってあわてて捨ててしまわないで、しばらくの間様子を見ていると芽が出てくることもありますので、気長に様子を見てください。
草花と違い実生はあまり行いません。ヤシ類など挿し木不可能なものや、サンセベリアのように挿し木すると先祖返りして斑が消えてしまうものもあります。なお、斑入りや新しい品種は脆弱な場合が多いです。

熱帯の原始的な魅力は原種の方が豊かなように思いますが、見慣れてくると飽きてくるのでしょうか。
多肉植物は、乾燥地帯に生育するという特徴があり、低緯度特有の大量の日照とあいまった特殊な環境ですから、育てるには事前に十分研究する必要があります。

スパティフィラム

スパティフィラムは、アメリカの熱帯域中心に、東南アジアへも分布している植物です。日陰でも育てることができ、栽培初心者の方にとっても育てやすい人気植物です。
仏炎苞（ぶつえんほう）は、一見、花びらのようにみえますが、これは葉の一部になります。そして、仏炎苞に包まれた黄色い棒のような部分が肉穂花序（にくすいかじょ）といい、これがスパティフィラムの花になります。
通年室内でも育つほど日陰に強い分、直射日光では葉焼けを起こします。寒さには弱く、11月から3月くらいまでは室内で管理しないと枯れる場合もあります。

サンセベリア

昔はトラノオと呼ばれたもです。葉が多肉質で、乾燥に強い植物です。アフリカやアジアなどの熱帯や亜熱帯の乾燥地に自生しています。葉色は緑色単色のものや横縞模様が入るものがあり、草姿は株立ち状やロゼット状になります。一時い評判になったマイナスイオンを発生するのは、夏の強光の中でのことです。
寒さには極めて弱く、15度以下になると、一見元気なようでも、春になると溶けてなくなってしまうので注意が必要です。

10月中旬から3月下旬まで室内で管理し、その間は水をやってはいけません。

ピレア

ピレアは、熱帯から亜熱帯で生息する多年草です。

暑さに強いのですが、日本の厳冬期は苦手です。東京の新宿の場合11月中旬から3月中旬まで室内に取り込めば大丈夫です。冬はあまり水をやりすぎないようにしましょう。

強光には弱く葉が焼けたりしますので、夏季は木漏れ日のような環境が望ましいです。

葉焼けとは、葉の厚みが薄い植物や斑入りなど、色素が薄い場合に生じやすいです。葉の葉緑素が強い直射日光で壊れてしますのです。

特に、葉が薄い植物は水が蒸発しやすいので、葉焼けしやすいです。

多肉植物

アロエも温帯性多肉植物で、医者いらずとも呼ばれ広く親しまれています。写真は木立アロエですが、葉の大きい食用のアロエベラもあります。どちらも薬効が著しいことで有名です。花も可憐で鑑賞用にもよいでしょう。古くなると木化して食用には向かなくなりますが、挿し木や、株分けで簡単に増やすことができます。
話が逸れますが、薬効が昔から伝えられている植物は身近に置くことをお勧めいたします。雪の下や花梨、枇杷など鉢に植えておくと何かと重宝します。

サボテン

サボテンというと球形の刺にいろどられた金鯱を思い浮かべます。翁ともども世界中で人気のある植物です。数十年かけて形作るものですが、最近は100均などでも子株が販売されていて身近なものになっています。同じ熱帯植物でも、ゴムの木の艶やかな葉と峻厳なサボテンの刺は良いコントラストを見せております。用土は市販のサボテン用の物をお勧めいたします。
サボテンといえば砂漠ですが、砂漠地帯の降雨量は年間200㎜以下です。それもいっきに数日で降ってしまい後は熱帯の太陽が照らし続けるのです。その気候に対応する姿がこの造形を造りだしたのです。ベランダ園芸なら同様な気候を作り出すことは可能かもしれません。